ぎふの
センターだより「きずな」

埋蔵文化財

財団法人 岐阜県教育文化財団
文化財保護センター
2005.3.1
No. 42

岐阜県の埋蔵文化財情報が満載

特集
徳山の遺跡から

考古学教室③
飛騨の須恵器

整理作業所に行こう!!
クイズ これってなあに？

現地説明会報告
赤保木遺跡・野内遺跡

センター掲示板
大好評!発掘速報展 2004ほか

塚奥山遺跡（旧徳山村）出土の縄文土器

特集 徳山の遺跡から 山のくらしと人々の交流

徳山に遺跡がたくさんあるのはどうして？

旧徳山村は揖斐川の最も上流にありました。平野部から山道を上ること約50㎞、もうひと山越えると福井県になるという場所です。村内を流れる川沿いにある日当りの良い平地には縄文時代を中心とした遺跡がなんと30以上もあります。そこで発掘調査をしていると、「平野からこんなに離れた場所に、縄文人はどうして住んでいたの」といった質問をよく受けます。みなさんは、どう考えますか。

縄文時代の遺跡からは、土器と石器がたくさん出てきます。これらの道具は何をするために使われたのでしょうか。土器をよく観察すると、外側にすす、内側にはこげが付いているものを見つけることができます。火にかけて何かを煮ていたのでしょう。石器では、弓矢の先につける矢じり、物を磨り潰すための磨石と石皿、漁網のおもりに使われたと思われる刻みの入った小石、つまみのあるナイフ、木を切り倒す斧、土を掘る鍬などがたくさん見つかります。これらの道具を使った生活を想像してみてください。

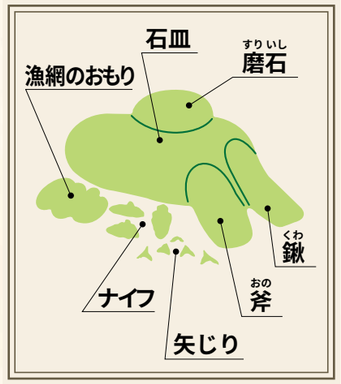
野では鹿やいのししを狩り、山では栗や栃の実などを拾い、川では魚の群れを追い、地面を掘り、切り倒した木を立て自分の手で住まいを作る。そんな生活を営むのに最もふさわしい場所、徳山の地は、自然と共存する人々が探しあてたふるさとなのではないでしょうか。

独立行政法人水資源機構徳山ダム建設所 提供

内面にこげが付いた土器
（櫨原村平遺跡出土）

縄文時代のくらし（想像図）

さまざまな石器（櫨原村平遺跡出土）



遠く旅する土器や石

口酒井遺跡出土
（伊丹市教育委員会提供）

いんべ遺跡出土（旧徳山村）

北川貝塚出土
（（財）横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター提供）

上原遺跡出土（旧徳山村）

上の4つの縄文土器をよく見比べてみてください。左右の2つずつ隣同士のプロポーションがなんとなく似ていると思いませんか。別々の作り手が自分の思いにしたがって作った結果、偶然に似たものができたのではありません。決まったルールに従って作られた、いわば「兄弟の土器」なのです。

しかし、この4つが出土した場所はといえば、中央の2つは徳山、左端は兵庫県、右端は神奈川県です。遠く離れた場所で兄弟土器が見つかるのは一体どういうわけでしょう。この例の場合は、左2つのタイプは西日本各地で、右2つのタイプは中部から関東で広く出土していることから、土器作りのルールが人から人へ伝わっていったと考えられています。一方では、土器の粘土を分析した結果、他の場所で作られた土器が運ばれている例も知られています。

また、黒曜石という石をごらんになったことがありますか。矢じりやナイフを作る材料として有名な石ですが、日本の限られた場所でしか採れません。徳山の縄文遺跡で見つかった黒曜石の産地を調べたところ、左は長野県、中央は伊豆半島（静岡県）、右は伊豆諸島の神津島（東京都）であることが分かりました。これらの石も当時の人の手で運ばれていたことが明らかになっています。

このように土器や石を見ていくと、何千年ものはるか昔に人々が広い範囲で何らかの交流をしていたことが分かるのです。

戸入村平遺跡で出土した黒曜石

峠を越えた甕や擂鉢

甕を背負い峠を越える人（想像図）

越前の擂鉢（櫨原村平遺跡出土）

徳山では、縄文時代のあと、弥生時代の土器がわずかに見つかっていますが、しばらくの間は人間の活動を示す跡や物は見られなくなります。奈良時代になり、ぽつぽつと人が入りはじめ、室町時代には旧徳山にあった集落のもとができ、再び社会生活が営まれるようになっていきました。

そうしたなか、室町時代を中心に日常生活で使われた陶器には、美濃や瀬戸のものに混じって、越前（福井県）で焼かれた甕や擂鉢が多く含まれているといったことが分かっています。現在の生活圏とは異なり、国の境をまたいだ峠越えの往来がさかんであった証拠といえるでしょう。

ちなみに、昭和になってからも徳山で法要を営むときは、福井県の鯖江市にあるお寺の住職を招いていました。これは、かつて越前と深いつながりがあったことのなごりであるといえるのではないでしょうか。

※上掲の上原遺跡出土の縄文土器は、平成17年7月29日（金）まで藤橋村徳山民俗文化財収蔵庫において展示公開しています。ぜひご覧下さい。

考古学教室3

飛騨の須恵器（すえき）器

小淵　忠司

須恵器は、古墳時代から平安時代にかけて使われた青灰色（せいかいしょく）の硬い焼き物です。山の斜面などに築かれた窯（かま）で多量に生産され、食器などとして使用されました。県内各地で出土していますが、地味な印象のある焼物であるためか、飛騨地方ではこれまであまり注目されることがありませんでした。

平成10年度から15年度にかけて調査を行った太江（たいえ）遺跡（飛騨市古川町）では、古代寺院「寿楽寺廃寺（じゅらくじはいじ）」の遺構と、寺院を取り巻く集落跡が見つかり、地元産とみられる多量の須恵器が出土しました。水洗いして土や汚れを落とした破片を接合し、出土状況から新旧関係を判断するなど分析を進めることにより、飛騨地方における須恵器の形の移り変わりなどが明らかとなってきました。

図1は「実測図（じっそくず）」といって、器の形を写しとり、特徴を図面上に記録したものです。真横から見た形を図にしており、右半分の黒く塗りつぶした部分は器の断面形を表現しています。①のような角張った形の器は杯（つき）と呼ばれ、7世紀後半から8世紀にかけて主要な食器として広く使われました。②③は杯よりなだらかな形の食器で碗（わん）と呼ばれます。杯より遅れて登場する器種です。②は9世紀頃、③は10世紀頃の代表例です。このように並べてみると、器の形は少しずつ変化しており、しかも変化の仕方には法則性があることがわかります。これら3つの器にみられる形の違いは、主に器の底の大きさが変わったことにより生じたものです。

それでは、なぜ、そのような変化が起こったのでしょうか。その問いに答えるには、これらの器がどのような技法で作られたのかを調べる必要があります。須恵器はロクロのような回転する台の上で成形されますが、台から製品を切り離すのに、当初はヘラを用いていました。これを「ヘラ切り技法」といいますが、①の底部外面中央にみられる盛り上がりはヘラ切り技法による切り離しの痕跡です（写真1）。これに対して、平安時代頃になると新たに糸を使って切り離す「糸切り技法」が広く知られるようになり、②③ではこの技法が使われています。写真2は③の底部外面です。ロクロを回転させながら糸をからめて切り離すので、「回転糸切り痕（こん）」と呼ばれる年輪のような痕跡が残ります。ところで、糸切り技法は便利ですが、器の底部裏側中央が内側に反る形になりがちな欠点があるとされています。しかし、底を小さく作れば、反りを小さくすることができます。そのため、糸切り技法導入後、杯（①）は底が小さくなって碗（②）に変化し、その後も底の縮小化が続いて③への変化を遂げたと考えられます。つまり、技法の変化が器の形の変化を引き起こしたと考えられるのです。

写真1　ヘラ切り技法
（図1-①の底）

写真2　糸切り技法
（図1-③の底）

太江遺跡で出土した須恵器の碗を一つずつ観察してみた結果、回転糸切り痕が認められるのが普通で、ほとんど例外はないことがわかりました。これは平成14年度から15年度にかけて調査を行った中野大洞平（なかのおおぼらだいら）遺跡（飛騨市古川町）の須恵器でも同じでした。糸切り技法は、美濃地方では須恵器の生産においてはあまり活用されることのなかった技法と言われており、今回明らかとなった飛騨地方における定着状況は、美濃地方とは対照的です。須恵器は一般に、全国的に形や作りに共通性が高く、どの地域でもだいたい同じような製品を生産していたとされていますが、詳しく調べることにより、地域独自の特色があることも明らかとなるのです。

参考文献
古代の土器研究会2001『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東6
須恵器の製作技法とその転換－』

図1 須恵器の形の移り変わり（太江遺跡）

整理作業所へ行こう!!

クイズ これってなあに？

～整理作業編～

整理作業所では、報告書を作り上げるまでにいろいろな道具が大活躍！今回はその中でも4つの道具にスポットを当ててみました。みなさんはこの道具がどのように使われるか、わかるでしょうか。全問正解して、目指せパーフェクト考古学者!!

Q1

これは接合の時に使うものです。1つが3㎜ほどの小さなプラスチックの粒です。これってなあに？

①接着剤で接合した土器を、これに差し込んで乾かすもの。
②土器の中に入れて、この形に沿って接合していくもの。

Q2

これは遺物を図で表すときに使うものです。厚さ0.2㎜にさいた竹が何本も入っていて自由自在に動きます。いろいろな大きさのものがあります。これってなあに？

①土器などの口の部分に当てて、深さを測るもの。
②土器などに当てて、曲線部分の形を表すために使うもの。

発掘調査 → 洗浄・注記 → 接合・分類 → 復　元 → 実　測 → 報告書作成 → 完成！

Q3

これは土器などを復元するときに使うものです。小麦粉のようにさらさらで、少し灰色をしている粉です。これってなあに？

①水といっしょに練って粘土状にし、土器の足りない部分に入れて、完全な形にしていくもの。
②形になった土器にふりかけて、こわれにくくするもの。

Q4

これは遺物を図で表すときに使うものです。コンパスのような形ですが、先は両方とも針のようにとがっています。これってなあに？

①土器の模様にある円や平行な線を図に描き表すときに使うもの。
②描きたい2点の距離を測るもの。

整理作業所へ行こう!!

クイズ これって なぁに？ ～こたえ編～

三田洞整理所

飛騨整理所

これは「ネコズナ」です。

（東野遺跡の接合の様子）

正解は①です

接着剤で土器のかけらを接合したあと、その形を崩さずに乾かすために、さしこんだり、おいたりして乾かします。ネコズナは自由に形が変化するので、土器に余分な圧力がかからずに乾燥させることができます。

これは「マコ」です。

（野内遺跡の実測の様子）

正解は②です

土器の曲線など、図に表しにくいものでも、マコを当てればあっという間に形を写すことができます。当てて形をとったものを図面に表します。

これは「土器補修剤」です。

（上恵土城跡・浦畑遺跡の復元の様子）

正解は①です

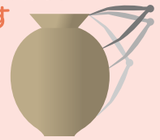
少しずつ水を加えながら、ボウルの中で練っていくと粘土のようになります。それを土器の足りない部分に入れていきます。2時間待てば乾いてできあがり。あとは、削ったり模様を入れたり色をぬったりして復元完了です。

これは「デバイダー」です。

（中野大洞平遺跡の実測の様子）

正解は②です

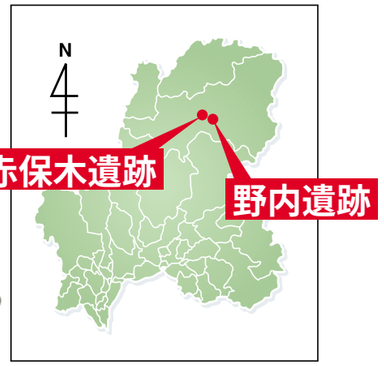
土器の表面にある、曲線の曲がり具合（変化点）を測るときに使います。1つの点を決めて、そこからの距離を測って図に表します。



４問	２～３問	０～１問
すばらしい！パーフェクト考古学者。今すぐ整理所へきていっしょにやりましょう。	あと少し！ベテラン考古学者。ワンランクステップアップするために整理所へきてください。	残念！まだまだかけだし考古学者。経験を積むために整理所へきてください。

現地説明会報告

飛騨の2遺跡で行われる



発掘調査の様子を広く県民の皆さんに知っていただくための現地説明会を、東野遺跡（坂祝町）に続いて、高山市の赤保木・野内の2遺跡で行いました。地元を中心に県内外から多くの方々の参加がありました。

赤保木遺跡（高山市）

縄文　弥生　古墳　古代

今年度の調査で、縄文時代中期から古墳時代にかけての竪穴住居跡31軒を確認しました。そのうち21軒は縄文時代中期のもので、うち12軒の住居跡では、大変残りのよい石囲炉を確認することができました。遺物は縄文時代の土器や石器を中心に約2万点が出土しました。

動物をデザインした突起をもつ縄文土器（動物意匠文土器）は、大変珍しい出土遺物といえます。

説明会の当日は、雨天にもかかわらず141名もの方々の参加があり、住居跡や出土遺物などを熱心に見学していただくことができました。

野内遺跡（高山市）

弥生　古墳　古代　中世

野内遺跡B地点では、今年度の調査で、古代（奈良～平安時代）の竪穴状の遺構55基を確認しました。この中には鉄鍛冶の作業を行った工房の可能性がある遺構が多数含まれており、古代の鉄鍛冶工房が、丘陵裾の緩斜面全体に県下最大級の規模で広がっていたことが分かりました。また、弥生時代の竪穴住居跡2軒や古墳時代の竪穴住居跡8軒も確認できました。

野内遺跡D地点では、水田跡やそこに残された当時の人々の足跡、飛騨では類例の少ない中世の掘立柱建物跡などを確認することができました。

説明会には148名の参加があり、鉄鍛冶を行った可能性のある遺構や中世の掘立柱建物跡について熱心に質問される方々もみられました。

＊当日参加できなかった方々のために、遺跡についての情報をセンターのホームページで紹介しておりますので、ぜひご覧下さい。

センター掲示板

大好評！ 発掘速報展2004

「発掘速報展～いにしえの美濃と飛騨～」を、11月16日（火）～12月19日（日）の期間で、岐阜県博物館において開催いたしました。今年度は、平成14・15年度に発掘調査を行った遺跡を中心にして、10箇所、14遺跡から出土した遺物の展示を行いました。展示内容としては、縄文時代早期（約9,000年前）～鎌倉時代中期（約800年前）の長い時代にわたって、集落、古墳、古窯跡という様々な遺跡を紹介しました。

期間中、4,300名を超える皆様にご覧いただきました。土・日・祝日に行った展示解説では、うなずきながら熱心に説明を聞いていらっしゃる見学者の方々の姿が印象的でした。

また、会期中の11月28日（日）には、奈良大学教授の水野正好先生をお招きし、「発掘で甦（よみがえ）る『古代のまつり』」と題して講演会を開催しました。当日は118名の参加をいただきました。発掘で出土した遺物などから読みとれる古い時代の風習をわかりやすく、またテンポよく話していただきました。

センター日誌

11月

1（月）　県民ふれあい会館展示コーナーにてパネル展開催（～11/30）
　　「縄文の遺跡ってどんなもの？　藤橋村徳山地区の遺跡②」
13（土）　野内遺跡（高山市）現地説明会（148名）
16（火）　岐阜県博物館にて平成16年度発掘速報展～いにしえの美濃と飛騨～開幕
28（日）　発掘速報展講演会＜講師：奈良大学教授水野正好氏＞（118名）

12月

5（日）　走る県政バス発掘速報展見学（40名）
8（水）　赤保木遺跡（高山市）現地発掘調査終了
13（月）　清願寺跡（美濃市）発掘調査地元見学会（17名）
15（水）　野内遺跡D地点現地発掘調査終了
19（日）　平成16年度発掘速報展閉幕（期間中入館者4,303名）
24（金）　野内遺跡B地点、清願寺跡現地発掘調査終了

1月

17（月）　県民ふれあい会館展示コーナーにてパネル展開催（～2/28）
　　「縄文の遺跡ってどんなもの？　飛騨の縄文遺跡①」
20（木）　消防防災訓練（三田洞事務所）
24（月）　消防防災訓練（飛騨出張所）

2月

8（火）　岐阜市ハートフルスクエアーGにてミニ発掘速報展開催（～2/22）
10（木）　揖斐川町徳山民俗資料収蔵庫にて「『上原遺跡とくわ』展」開催（～7/29）

あとがき

3月1日から花フェスタ2005ぎふ、25日から愛・地球博が開催されます。開催に合わせて3月19日に東海環状自動車道（東回り）が開通する予定です。当センターでは、平成8年度から東海環状自動車道建設に伴い23遺跡の発掘調査を行いました。弥生～室町時代の集落跡と多くの灌漑施設が見つかった柿田遺跡（可児市・御嵩町）、陶製の人物像頭部が見つかった丸石古窯跡群（土岐市）など多くの発見がありました。調査の成果を収めた発掘調査報告書を図書館などでぜひご覧ください。遺跡は工事により消滅しましたが、道路を通るとき、ここにこんな遺跡があったといつまでも心に残ることでしょう。出土品や調査記録は今後も大いに活用していきたいと考えています。

Center News

ホームページ
http://www.maibun.gifu-net.jp

三田洞事務所
〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1
TEL. 058-237-8550（代）FAX. 058-237-8551
e-mail : gifu@maibun.gifu-net.jp

飛騨出張所
〒509-4122　岐阜県高山市国府町名張字峠1425-1
TEL. 0577-72-4784（代）FAX. 0577-72-4690
e-mail : hida@maibun.gifu-net.jp

PRINTED WITH SOY INK　R100 この印刷物は環境にやさしい植物性大豆インキと古紙配合率100%再生紙を使用しています。